

## 国語教育は“読み”が中心

戦後の国語教育、最大の誤りは「従来の読み方中心の教育を“話す”“聞く”“読む”“書く”といふ四本柱に改めたこと」であると思ふ。これはアメリカ教育の全くの模倣である。多民族国家のアメリカでは、英語を話し聞く能力に欠けてゐる者が多い。だから、アメリカでは大いに“話す”“聞く”能力を養ふことを重視する必要があるのである。

然し、日本では、入学する前から、自分の言ひたい事を話し、先生の言ふ事を十分に聞き取る能力を身に付けてゐる。それ以上の“話す”“聞く”能力を養ふのには、“話す”“聞く”学習よりも、むしろ“読む”学習の方が有効なのである。それは、“読む”学習によって語彙が豊かになり、理解力が深まることが、“話す”“聞く”能力を育てるのに大層役立つからである。だから、戦前は、国語の教科書は“読本”と言ひ、国語の学習時間は“読み方”の時間と言って、国語は“読み”の学習が中心だったのである。

敗戦によりアメリカの真似をしたのであるが、“読み方”が軽んぜられた結果、小学校の教材から“文語文”が無くなった。「難しい言葉を出来るだけ易しく」といふのがその言ひ分である。確かに私たち大人は難しい言葉には弱い。一続きの文の中に解らない言葉が一つあつただけでも、読んでみていやな気持になる。然し、子供にはそれが通常の状

態なのである。だから、解らない言葉にぶつかっても、私たちのやうにはいやな気分にはならない。いや、それどころか、さういふものを喜んで求めてゐるやうに私には思はれる。それで、新しい語彙がどんどん身に着くのだと思ふ。